



井戸車



担い桶と天秤棒

手桶

バケツ



水瓶



手水鉢



車井戸用の釣瓶



カケド

竿を取り付ける
孔のある桶

ゲンバオケ



手押しポンプ

寄贈資料の中から 水廻りの道具

今回は、資料の中から家庭で使われる水廻りの道具を紹介します。沼津市では地下水が豊富な所が多く、家ごとに井戸を持ったり、地域によっては簡易水道が運営されたりしていました。市営の水道が始まったのは戦後になってからです。

井戸車は木や鉄でできた大型の滑車です。井戸の上に横木を渡して吊り、一对の釣瓶を上下させて水を汲み上げます。釣瓶は井戸専用の桶で側板が厚く、口縁の内外と桶の下部に帯鉄がはめられ、縄を縛るための太い横木と鉄輪が口縁の内側につけられています。とても頑丈なつくりで、かなりの重さがあります。浅い井戸では桶に竿を取り付けて引き上げる方法で水を汲むことができました。井戸から汲んだ水は手桶に入れたり、担い桶に入れて天秤棒で担いだりして運びます。バケツは金属製の手桶です。明治中期に外国から入ってきたもので、早くに国産化され普及しました。水を運ぶ先は台所や風呂などです。台所で使用する水は、流しの横に置かれた水瓶にたくわえておきます。

カケドは小型の鉄の碇で、イカダとも呼ばれます。輪の部分に紐をつけておき、釣瓶の縄が切れて井戸に落ちた時などはこれを使って引き上げます。

また、井戸替えといって、年に一度、井戸の水をすべて汲み上げて掃除をします。これは七夕の頃に行われることが多かったようです。この作業は大掛かりなため、井戸を使う人々が協力して行いました。通常は釣瓶を使って何度も水を汲みますが、ゲンバオケという大型の桶を使用する所もありました。

手押しポンプは圧力により水を吸い上げる装置で大正時代に使われ始め、釣瓶井戸に替わり普及しました。手水鉢は陶器の鉢で、便所の入口近くの濡れ縁の片隅に設置した台へ置き、手洗いの水を入れるものです。柄杓を使って片手ずつ手を洗います。

排水は、戸外に掘られたスイコミやドブと呼ばれる穴に流しました。地下水に入り込まないように井戸よりも下流に設けました。また、排水量が多すぎると穴からあふれるので、使う水の量にも気を使いました。

駿河湾の漁

金指 貢さんの漁話

こ しょう
小海の網組 長宝組

沼津で行われてきた漁は、^{たちきりあみ}建切網・^{きん}大型定置網・^{さし}巾着網といった大人数の網組を組織して行う漁と、^{あみ}刺網・^{つりりょう}釣漁・^{つきりょう}突漁といった個人や少人数で行うコショウバイと呼ばれる漁に分かれます。今号より内浦地区小海の網組である長宝組の^{ぎょうろうちょう}漁労長を長く勤められてきた金指さんに昔の漁に関する様々なお話を語っていただきます。

コショウバイを中心に行ってきた漁師たちがこのまま小さな漁をしても商売にならないので、沖へ出て共同でアジを捕り行こうということになり、大正7年頃、13人の漁師によって長宝組の元となる網組が設立されました。当初、組の名前はありませんでした。大正10年頃、^{ししはま}獅子浜の^{やすけ}弥助組という網組から船を購入した時に「名前がないのならそちらに売る船の名前が長宝丸だから長宝の名前で漁をしてみてもは？」との提案を受け長宝組という名前になりました。

設立に関わった13人の漁師は長宝組の株を持つアミモト（網元）となり、オヤカタ（親方）とも呼ばれていました。アミモトとは別に株を持たない漁師はノリコ・ノッコ（乗組員）と呼ばれていました。現在の長宝組では8人のアミモトによって運営されています。

毎年1月にアミモトが集まってその年の方針を話しあう時に、アミモトの中から網組の代表者で諸経費の勘定を行う時の責任者となるオオオヤカタ（大親方）が選ばれます。また、これとは別に漁の現場での責任者である漁労長も決められます。漁労長は海の情勢から魚の到来を予測し出漁の判断を行うため、経験豊かな人が選ばれました。金指さんの時はオオオヤカタと漁労長を兼務していました。漁労長の下には各船の船長となるセンドウ（船頭）がつかいます。

オオオヤカタの重要な仕事である勘定はどのように行われていたのでしょうか。次に金指さんがオオオヤカタに選ばれていた時の勘定の仕方を見ていきます。勘定は月に一度、アミモトたちが集まって話し合いが行われます。まず、船の油や魚の鮮度を保つための氷といった操業する上で必要なオオナカ経費と呼ばれる費用をその月の売上から差し引きます。その残りの6割を漁師のシロ（代）、4割をアミシロ（網代）に分けます。漁師のシロはアミモトを含んだ漁師の数とオカマワリと呼ばれた毎日の漁が終わった後に網の手入れをする人たちの数（オカワマリ一人は漁師一人の8割と換算）に十を足した数で割り、^{ひと}一シロが求められます。この一シロが漁師一人分の手当になります。最後に足した^と十シロは船の整備費用や今後の設備投資の

ために使われます。アミシロからは網の購入費や不漁の時に備えるための貯蓄費などに充てられ、その残りをアミモトで分配します。このアミシロから出される費用にホネオリ（骨折）というものがあります。このホネオリはマグロをいち早く発見したとか網を揚げる時に頑張ったといった網組への様々な貢献度から一シロの何割という形で出される特別手当になります。特に未婚の若い衆には必ずホネオリを出していました。これを出すことによって漁に対する励みになっていました。帳面には「骨折」と書き込んでいたため、生命保険の監査の人から「長宝組はずいぶんとけが人が多いですね」と言われたこともありました。

長宝組のアミモトの中で月ごとに交代するトウバン（当番）という制度がありました。トウバンの家は漁から帰ってから行われるオキアガリと呼ばれたアミモトの反省会の宿となります。酒を酌み交わしながら行われるので、酒好きなノリコも集まり、30人近い人数でオキアガリを行っていました。オキアガリの費用はオオナカ経費から出されていたのでトウバンの家には金銭的な負担はありませんでしたが、その準備を行うという点では大きな負担になりました。そのため、漁師も酒の肴を作り、準備を手伝いました。夜間に行う巾着網を行っていた頃は朝方に港へ帰ってくるので、オキアガリは朝7時頃から始まりました。昭和30年頃でオキアガリは中止され、現在は行われていません。

正月三が日やお盆（8月1日～3日）は休漁になります。また、長宝組には小海と三津の人たちが多くいることから、各集落のお祭りの日も休漁にしています。このような祝祭日とは別にツキササンヤスミ（月さん休み）という休漁期間があります。昔からの漁師の知恵で月が明るい日は思うような漁ができないという点と海洋資源の保護を兼ねて満月の日を中心に関前後7日間はお漁しないことになっています。この期間は網の手入れなど、陸上でできる仕事を行います。

（話：金指 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市三津在住）

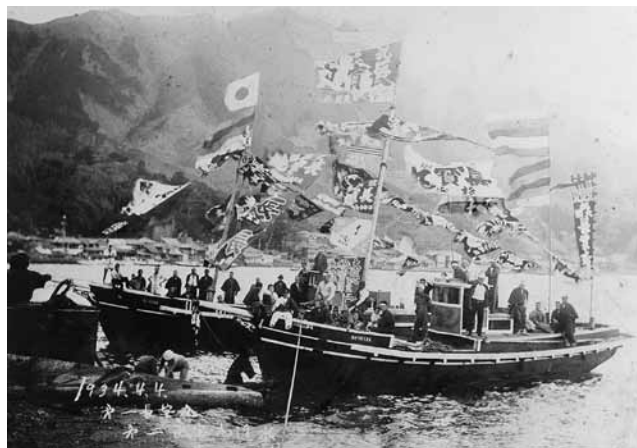


写真1：昭和9年に新造した第二長宝丸（手前）

（金指貢氏所蔵）

三浦点描② おか べ な が かげ 岡部長景と東瀛荘 とうえいそう

『岡部長景日記』（尚友倶楽部編1993柏書房）によれば、岡部長景氏が破産した高田商会の清算委員である銀行から別荘の土地・建物を取得したのは昭和4年4月末頃であり、それから、古い別荘の建物の修復に着手、同年の7月20日から8月3日、8月8日から16日、8月22日から27日には三津に滞在し、岡部氏自ら指揮して、建物の改修、園路の整備、造園や植栽などを行っている。風呂釜は日本橋の名和商会に発注し、蓄音機は銀座山野でコロムビアのものを購入、スカルとカヌーは本牧の岡田造船所に注文した。

別荘の改修で、特に問題になったのは水である。別荘は、痩せた岬の傾斜面に立地しており、白色凝灰岩の岩山に水源を求めるのはほとんど不可能で、尾根続きの発端丈の山腹から流下する小さな沢の水か山裾の湧水や井戸水に頼るしかなかった。山裾から別荘まで汲み上げるのは困難で、下で汲んで運び揚げるには労力がかかり過ぎる。高い場所に水源を取り、貯水槽を設けて水道管を敷設すれば、途中で低い場所があっても、サイホンの原理で別荘までは十分に引き込めるので、水源を確保し、水道を敷設することとなった。高田商会の別荘時代にも既に計画されていたようである。

三津には水源が乏しかったが、その奥に長浜から入り込む谷があり、今は蜜柑畑となっているが、水揚場というかなり高い場所から海岸近くまで、沢の水を利用した棚田があり、沢の水が比較的豊富に流れていた。

昭和4年10月19日の条には、水道を引くに当って、渋沢敬三氏が三津に別荘を設ける計画があるらしいから、それも考慮するように指示がされている。実際に渋沢敬三氏が三津に別荘を設ける計画があったようで、長浜の菊地敬二さんから伺ったところでは、今の山三ビューホテルのところが元の菊地家の水田と畑で、そこに渋沢さんが別荘を建てるということで、渋沢さんに土地を売却し、その代替として、小坂に新たに2反歩の水田を購入したとのことであった。



渋沢敬三氏の別荘用に設置した水槽
(コンクリート製で容積は1トン入りくらい)



長浜水揚場に残る農業用水の水槽
(コンクリート製、10メートル四方ほどで、深さは2メートル近い。)

また、その時に、上方にある蜜柑畑にあった湧水を別荘に引く予定で、コンクリート製の水槽を設けたが、別荘の計画は実現せず、水道も引かれなかったため、現在は、水槽からそのまま沢に水を流しているということであった。

過日、現地を確認したら、水源の湧水井戸は埋没してしまっていたが、貯水槽は現存していた。

渋沢敬三氏が、三津を最初に訪れたのは、氏の『旅譜』によれば、昭和4年のことである。これは昭和6年11月に没した祖父渋沢栄一氏の葬儀等のため過労で急性糖尿病を発病し、静養の為に翌7年1月から5月まで三津松濤館に長期滞在し、大川四郎左衛門翁と出会い、豆州内浦漁民史料の編纂へと繋がる話よりも、3年前のことである。目的は趣味であった釣である。

『旅譜』の昭和4年の条には、「8月14-19日東京…汽車…沼津…自動車…三津泊（松濤館）釣 スズキ960匁…」とあり、以後同年11月、昭和5年3月、5月、昭和6年5月に三津に釣に來た記録がある。それ以前、幼少期には毎夏静浦保養館に滞在している。

『旅譜』明治44年8月の条には「この前後十数年にわたり毎夏数週間を静浦保養館に滞在。…静浦滞在中、手押し舟にて淡島および三津湾に至り、二度ほど淡島北側に網にて囲い込まれし大マグロ数百尾中、商談成立にしたがい、所用本数を漁夫手カギにてマグロと相力闘して捕獲する勇壮な水揚げを見た。…」とあり、三津とのつながりは更に遡るようである。その後も昭和7年10月、8年6月、11月、9年11月、10年3月に訪れているが、以降は昭和27年10月に釣に立ち寄った記録しかない。

東瀛荘の水道は、結局、長浜の水揚場から引かせてもらうことになる。菊地敬二さんによれば、水揚場にはかつて、水田用の大きな貯水槽の上の方に、小さな水槽が幾つかあり、個別に水族館や旅館などにも引いていたそうである。

現在、水揚場にはコンクリート製の大きな貯水池が

残されているが、これは水田用の溜めとして作られたもので、近年の鉄砲水で使われなくなったが、それまでは、ここから引いた水を蜜柑の消毒用の水として使っていたとのことである。

『日記』5年7月28日の条には、「…沼津には松涛館の主人と野原さんが出迎えてくれ、自動車二台に分乗して二時近くに着いた。別荘の方は既に掃除も出来

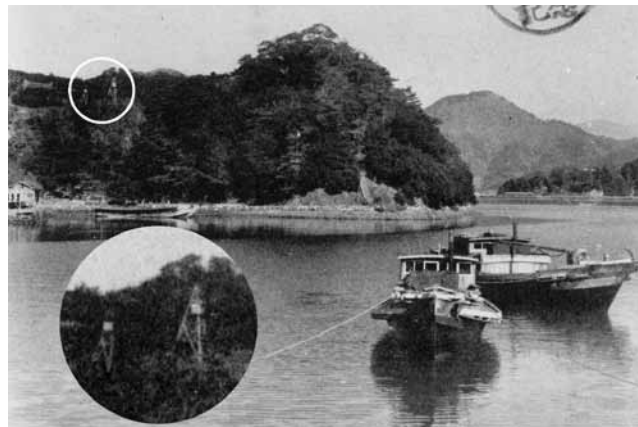
魚見のある風景⑬ おもすほら 重須洞

内浦重須には、洞と與瀬の2箇所の建切網の網戸（漁場）がありました。洞は道路の建設や終戦直前に特殊潜航艇「海竜」の基地が設けられるなど、埋め立てが進められ、早くから漁場としての機能は果たせなくなっていました。ここは、内浦湾の最も奥まったところにあり、回遊する魚群が入って来るのを待って捕獲するという、待ちの漁業である地先漁の漁場としては、あまり条件が良くなかったようです。

江戸時代の絵図では、長浜城跡のある城山の頂上に大きな櫓が組み、陰野川の河口右岸に網小屋があり、そこから山頂まで九十九折れの山道が通じていました。ここが元々の重須のオオミネだったと思われます。後にオオミネは、弁天島に移されたようです。

右の写真は、重須の集落から北西方向に弁天島を望んだもので、背後は長井崎、右後方は、重寺隔子鼻、大平山です。弁天島には魚見らしいものは見られませんが、左側の長井崎の尾根の縁に櫓が2基設けられて

て居たので荷物をほどこき、昨年とは異り速片付いた。殊に水道が出来上って居るから清水が出で、便所を改造したので臭気なく、昨年とは一段と気持ちがよい。夕方入浴後四人で晚餐を共にし、十時には早床に就いた。…」とあり、この時点では既に、長浜区との交渉が妥結して工事が完成し、水道が引かれていたことが解かる。



駿河湾八景 其六 重須弁天島

います。洞網戸のホガヨミドとして設けられたものと見られます。アンドからはすこし離れて過ぎているようにも思えます。三本柱のようで、他の地域のものに比べて低く、小さく感じます。

弁天島の右裾には、網小屋があり、ここから網船に積んだ建切網を建ち廻したようです。

資料館からのお知らせ

資料集29を刊行しました

本館では、寄贈・寄託を受けて収蔵している資料を広く活用していただくため、その存在や内容を広く知っていただくと共に、活用に当たっての利便性を高める目的で、資料集の刊行を続けております。

今回は、『沼津市歴史民俗資料館資料集29 古文書(16) 長浜大川家(大屋)文書目録』を発行いたしました。

本目録に収録した古文書は、内浦長浜の元津元オオヤ大川家に伝来した古文書です。同家に伝来した古文書のほとんどは、渋沢敬三氏が大川四郎左衛門翁の協力を得て『豆州内浦漁民史料』として翻刻・刊行し、現在は「伊豆国君沢郡内浦長浜村大川家文書」として国文学研究資料館に収蔵されています。数量は少ないですが、それらと同一の文書群を構成するものです。併せて同家から寄贈された家紋入りの什器なども紹介しています。近く、頒布を予定していますので、入手希望の方は資料館までお問い合わせください。

体験コーナーについて

本年度は、夏休み期間中に、玄関ピロティに火起こし体験のコーナーを設置する計画で準備を進めています。舞錐による火起こしと、火打石による火起こしの2つの方法を体験できるようにする計画です。

新たに舞錐を製作し、火打石・火打鎌を購入して準備を進めています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2016.6.25 発行 Vol.41 No.1 (通巻210号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp